資　料

臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討（第２報）
—成人看護学実習Ⅱ（クリティカルケア実習）終了後の調査を通して—

原田　秀子*　張替　直美*　中谷　信江*　高野　静香*

要約

本研究では、３年次学生43名を対象として、クリティカルケア実習における学生の達成感に影響している要因を分析すること、そしてそれを通して、クリティカルケア実習における教員の指導のあり方を考えることを目的とし、実習終了後に質問紙調査を行った。影響要因としては第１報の６要因にカリキュラムを加えた７要因をとりあげ達成感との関連性を分析した。

結果として、達成感との強い関連を認めた要因は、臨床指導者との関わり・既習の学習・自分自身の３つの要因であった。クリティカルケア実習においては、患者の状態を適切にアセスメントし、ケアを安全に実施するためには臨床指導者の指導・助言が特に必要であったこと、また展開が早く既習学習の活用の必要性が特に高かったこと、そのための自己学習も含め自分自身の努力がより必要であったことが結果に影響したと考えられた。そのことから、教員の役割として、臨床指導者と学生との関係づくりをサポートしていくこと、既習学習内容を想起させる教授方法の工夫、学生の努力を評価し肯定的な自己評価を強化していく必要があることが示唆された。

キーワード：達成感、影響要因、クリティカルケア実習、実習指導

Ⅰ．はじめに

臨地実習において学生は、常に変化する臨床の現場に身を置きながら、実習目標達成を目指すことを求められている。そのことから、目標達成にはさまざまな困難を伴うことになる。それだけに、困難な状況を乗り越えていく中で得られた達成感は学生の学習意欲を刺激し、主体的な学習活動を促す。

原田ら[1]の報告によると、実習における達成感に影響する要因として、患者との関わり・臨床指導者との関わり・教員との関わり・グループメンバーとの関わり・既習の学習・自分自身の６つをあげている。筆者の行った先行研究[2]では、この６つの影響要因をとりあげ追加検証した。その結果、患者との関わり・自分自身の２要因で達成感との関連が強いことが示された。

クリティカルケア実習においては、状態が変化しやすい患者を受け持つため、臨床指導者や教員からの助言をより必要とすることが予測される。また、既習学習の活用の機会も多くなることが予測される。また、人的要因や学生の努力以外の要因としてカリキュラムも加えることで、より多角的に要因を検討できると考えた。そのため、先行研究でとりあげた６要因にカリキュラムを加えた７要因を、本研究では影響要因としてとりあげ分析することとした。

本研究の目的は、クリティカルケア実習における学生の達成感に影響する要因を分析し、それを通して教員の指導のあり方を考えることである。

ここでの達成感とは、実習目標を達成し成功したという感覚と定義する。

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

本学看護学部の2001年度入学生で、３年次に在学し、成人看護学実習Ⅱを終えた学生43名（内訳：女性39名、男性４名）である。対象学生は、３年次前期に成人看護学実習Ⅰ（主にセルフケアの援助を必要とする成人患者対象）と老年看護学実習を終了している。３年次後期は成人看護学実習Ⅱ（主にクリティカルケアを必要とする成人患者対象）を３週間行う。学生は７～８名の実習グループに分かれ、主に病棟での実習を行う。各病棟に担当教員が１名配置され指導にあたる。

２．実習方法

３週間の実習期間のうち２週間は病棟実習を行い、１週間は救急部と中央手術部、血液センターでの見学実習（各１日）を行う。病棟実習では主に成人期～老年前期にある患者を１～２名受け持ち実習

＊山口県立大学看護学部

する。

3．病棟実習での受持ち患者の概要

病棟実習で学生が受け持った患者は45名であった。その内訳は、周手術期及び手術後の回復期にある患者15名、放射線治療あるいは抗癌剤治療を受けている患者13名、その他点滴治療中の患者８名、終末期あるいは急変のために実習中に亡くなった患者２名、その他７名であった。

4．調査方法

2003年度成人看護学実習Ⅱ終了後に質問紙調査を行った。無記名式の調査用紙を配布し、調査の趣旨を説明して承諾を得た。記入後はその場で回収した。

5．調査内容

原田ら[1]の調査内容に基づいて作成した前回の調査内容[2]を検討し、達成感と影響要因についての調査用紙を作成した。

実習での達成感については前回同様、得点化の基準を、５点:達成感があった～１点:達成感がなかったまでの５段階の間隔尺度で示し、回答は選択式とした。次に達成感に影響した要因については、１．患者との関わり　２．臨床指導者との関わり　３．教員との関わり　４．グループメンバーとの関わり　５．既習の学習（これまでの講義・演習・実習での学習すべてを指す）　６．自分自身（自己学習や自己の努力など）　７．カリキュラムの７項目をあげた。前回同様得点化の基準を、５点：達成感を高めた～１点：達成感を低下させたまでの５段階の間隔尺度で示した。

前回の研究[2]では、達成感を従属変数とし、６つの影響要因を独立変数として重回帰分析を行った結果、決定係数が低く、前回用いた６つの独立変数以外の変数による影響が大きいことが推測された。追加する変数を検討するにあたり、実習目標や実習方法、それまでの学習の順序性も含めカリキュラムの影響は大きいと考えた。そのため、本研究ではカリキュラムを変数として加えた。また達成感に影響を与えた具体的な内容については、前回の調査[2]での自由記載内容をもとに内容を抽出し、達成感を高めた内容と低下させた内容とに分けて項目を作成した。回答は選択式で複数回答も可とした。

6．分析方法

統計処理は統計ソフトSPSS Ver10.0Jを用いて行った。分析方法は以下に示す。

1）達成感と、達成感に影響する７要因の影響の程度をスコア化し平均値を求める。

2）達成感にどの要因が強く関与しているかをみるために、達成感と達成感に影響する７要因とを重回帰分析を用い検討する。

3）達成感に影響を与えた具体的な内容について分析する。

Ⅲ．結果

質問紙は43部配布した。回収数43部、回収率100％、有効回答数43部、有効回答率100％であった。

1．実習での達成感の得点と達成感に影響する７要因の得点について（表１）

達成感の得点の平均値は3.81であった。達成感への影響要因として、グループメンバーとの関わりの影響得点の平均値が4.53で最も高く、次いで高かったのが、患者との関わりと教員との関わりであり、いずれも4.12であった。一方最も低かったのはカリキュラムであり、影響得点の平均値は3.05であった。

2．達成感に影響する７要因の分析結果について（表２）

達成感の得点を従属変数とし、達成感に影響した７つの要因の影響得点を独立変数として重回帰分析を行った。その結果達成感と関連の強い要因は、臨床指導者との関わり・自分自身・既習の学習の３つの要因であった。

3．達成感に影響した具体的な内容（表３）

７つの影響要因別に、達成感に影響した具体的な内容の回答割合は以下の通りである。

まず患者との関わりについては、達成感を高めた内容として、「コミュニケーションがよくとれた」、「受け入れがよかった」という項目を選択した割合がいずれも65.1％と最も高く、次いで「患者の思い

表１　実習での達成感と７つの影響要因の得点（n＝43）

	平均値	標準偏差
達成感	3.81	0.76
患者との関わり	4.12	0.79
臨床指導者との関わり	4.1	0.8
教員との関わり	4.12	0.86
グループメンバーとの関わり	4.53	0.59
既習の学習	3.63	0.72
自分自身	3.42	0.91
カリキュラム	3.05	0.62

表２　重回帰分析による達成感と7つの影響要因との関連（n＝43）

従属変数 / 独立変数	達成感 β	達成感 γ	達成感 有意確率	
患者との関わり	0.165	0.276	0.098	
臨床指導者との関わり	0.33	0.498	0.002	＊＊
教員との関わり	0.041	0.067	0.695	
グループメンバーとの関わり	0.082	0.152	0.369	
既習学習	0.205	0.334	0.043	＊
自分自身	0.572	0.685	0	＊＊
カリキュラム	−0.125	−0.192	0.255	

β＝標準偏回帰係数　γ＝相関係数　＊＊ $p<0.01$
$R=0.852$　$R^2=0.726$　＊ $p<0.05$

や意思を聴くことができた」60.5％であった。一方達成感を低下させた内容としては、「患者との関係に深まりがなかった」を選択した割合が14％で最も高かった。

臨床指導者との関わりについては、達成感を高めた内容として、「適切な助言・指導を受けケアを進める上で役に立った」という項目を選択した割合が79.1％と最も高く、次いで「学生の話を聞いてくれた」72.1％であった。一方達成感を低下させた内容としては、「怖かった」を選択した割合が23.3％で最も高かった。

教員との関わりについては、達成感を高めた内容として、「教員から声をかけてくれた」という項目を選択した割合が74.4％と最も高く、次いで「適切な助言・指導を受けケアを進める上で役に立った」72.1％であった。一方達成感を低下させた内容は、選択した割合が各項目とも低かった。

グループメンバーとの関わりについては、達成感を高めた内容として、「グループ内の人間関係が良好だった」という項目を選択した割合が86％と最も高く、次いで「話を聞いてくれた」83.7％、「カンファレンスを通して問題の共有ができ問題解決につながった」81.4％であり、いずれも８割以上であった。一方達成感を低下させた内容の選択はなかった。

既習の学習については、達成感を高めた内容として、「前回までの実習での教員のアドバイスが役に立った」という項目を選択した割合が62.8％と最も高く、次いで「前回までの実習での臨床指導者のアドバイスが役に立った」55.8％であった。一方達成感を低下させた内容としては、「以前に学習したことを忘れていた」を選択した割合が44.2％で最も高かった。

自分自身については、達成感を高めた内容として、「自分なりに頑張った」という項目を選択した割合が76.7％と最も高く、次いで「自分の行った看護を見つめ直すことができた」60.5％であった。一方達成感を低下させた内容としては、「自己学習が不足していた」を選択した割合が51.2％で最も高かった。

カリキュラムについては、達成感を高めた内容として、「実習期間が適切だった」という項目を選択した割合が27.9％と最も高かったが、回答率は３割に満たなかった。一方達成感を低下させた内容としては、「実習期間が不適切だった」を選択した割合が25.6％で最も高かった。

Ⅳ．考察

達成感に影響する７つの要因の内、達成感との強い関連を認めた臨床指導者との関わり・既習の学習・自分自身の３要因を中心に考察し、今後の教員の実習指導のあり方を検討した。

１．臨床指導者との関わりについて

重回帰分析の結果から、臨床指導者との関わりは達成感との強い関連を認めた。前回の結果[2]では関連性は認めなかったことから、達成感との関連が前回に比べ強いことが伺えた。また、影響得点の平均値は4.07で７要因中３番目に高得点であった。

今回は、状態が変化しやすい患者を受け持っての実習であったため、患者の状態を適切にアセスメントするためには、臨床指導者からの助言がこれまで以上に必要であった。また、ケアの際にも、患者の負担を最小限にしながら、より安全性の高いケアを提供することが必要であり、そのためには臨床指導

表３　達成感に影響した具体的内容（複数回答）　n＝43

	項目	回答数	%
1 患者との関わり	**高めた内容**		
	受け入れがよかった	28	65.1
	コミュニケーションがよく取れた	28	65.1
	患者の思いや意思を聴くことができた	26	60.5
	ケアに協力してもらえた	21	48.8
	信頼関係が築けた	20	46.5
	患者の健康が回復した	11	25.6
	励ましてもらえた	10	23.3
	患者が学生のケアを評価してくれた	10	23.3
	低下させた内容		
	患者との関係に深まりがなかった	6	14
	コミュニケーションがうまく取れなかった	5	11.6
	患者の健康が悪化した	4	9.3
	ケアの協力が得られなかった	4	9.3
	受け入れが悪かった	2	4.7
2 臨床指導者との関わり	**高めた内容**		
	適切な助言・指導を受けケアを進める上で役に立った	34	79.1
	学生の話を聞いてくれた	31	72.1
	相談しやすかった	22	51.2
	フォローしてくれた	22	51.2
	指導者から声をかけてくれた	18	41.9
	指導に熱意が感じられた	15	34.9
	チームの一員として受け入れてくれた	14	32.6
	ケアに協力してもらえた	14	32.6
	励ましてもらえた	13	30.2
	低下させた内容		
	怖かった	10	23.3
	適切な指導・助言がなかった	5	11.6
	相談できなかった	5	11.6
	話を聞いてもらえなかった	1	2.3
	フォローしてもらえなかった	0	0
	チームの一員として受け入れてもらえなかった	0	0
	ケアに協力してもらえなかった	0	0
3 教員との関わり	**高めた内容**		
	教員から声をかけてくれた	32	74.4
	適切な助言・指導を受けケアを進める上で役に立った	31	72.1
	相談しやすかった	30	69.8
	学生の話を聞いてくれた	30	69.8
	励ましてもらえた	26	60.5
	指導に熱意が感じられた	20	46.5
	フォローしてくれた	20	46.5
	ケアに協力してもらえた	11	25.6
	低下させた内容		
	適切な指導・助言がなかった	2	4.7
	相談できなかった	2	4.7
	怖かった	1	2.3
	ケアに協力してもらえなかった	1	2.3
	話を聞いてもらえなかった	0	0
	フォローしてもらえなかった	0	0
4 GMとの関わり	**高めた内容**		
	グループ内の人間関係が良好だった	37	86
	話を聞いてくれた	36	83.7
	カンファレンスを通して問題の共有ができ問題解決	35	81.4
	につながった		
	励ましてもらえた	29	67.4
	ケアに協力してもらえた	9	20.9
	低下させた内容		
	カンファレンスでの意見交換ができなかった	0	0
	ケアに協力してもらえなかった	0	0
	話を聞いてもらえなかった	0	0
	グループ内の人間関係が悪かった	0	0
5 既習学習	**高めた内容**		
	前回までの実習での教員のアドバイスが役に立った	27	62.8
	前回までの実習での臨床指導者のアドバイスが役に立った	24	55.8
	前回までの実習での学生のアドバイスが役に立った	15	34.9
	講義・演習での学習が役に立った	14	32.6
	低下させた内容		
	以前に学習したことを忘れていた	19	44.2
	以前の学習内容をどう活用してよいかわからなかった	6	14
6 自分自身	**高めた内容**		
	自分なりに頑張った	33	76.7
	自分の行った看護を見つめなおすことができた	26	60.5
	成長できた	15	34.9
	自己学習ができた	15	34.9
	自分に自信がついた	5	11.6
	低下させた内容		
	自己学習が不足していた	22	51.2
	自分の行った看護に深まりがなかった	13	30.2
	頑張りが足りなかった	12	27.9
	自信がなくなった	5	11.6
7 カリキュラム	**高めた内容**		
	実習期間が適切だった	12	27.9
	実習目標が適切だった	11	25.6
	実習時期が適切だった	9	20.9
	実習方法が適切だった	5	11.6
	低下させた内容		
	実習期間が不適切だった	11	25.6
	実習時期が不適切だった	5	11.6
	実習目標が不適切だった	3	7
	実習方法が不適切だった	3	7

＊回答率が50％以上の項目は網掛けで示す

者と共に援助する必要性がこれまで以上に高かった。このように、指導者との関わりを密に持つ機会が多かったことが、関連の強さにつながっていると考える。

達成感を高めた具体的内容のうち、最も回答割合が高かった項目は「適切な助言・指導を受けケアを進める上で役に立った」であり、阪本ら[3]が示した看護学生に対する援助的関わりの中でも、学習の深まりや理解を促す指導が達成感を高めることにつながっていることを示している。

山下らは[4]、学生が未熟さを自覚し他者に援助を求めたり、他者からの援助を受け入れるという行動をとることは、円滑に実習を進めていく上で必要であると述べている。今回の実習においては、これまであまり経験のない急性期の患者が主な対象であったため、臨床指導者からの支援を求めたり、支援を受け入れるという行動が特に必要であった。しかし学生が自分の限界を自覚し、学生の方から支援を求める行動を起こすことは困難を伴いやすいため、臨床指導者からの「困っていることはない？」、「一緒にやってみようか？」といった働きかけが、学生の緊張感を和らげ支援を求める行動を起こすきっかけとして有効であると考える。これは、坂本ら[3]が示した看護学生に対する援助的関わりのうち、学生に関心を示す態度や支持的態度である。達成感を高めた具体的内容の中でも、「学生の話を聞いてくれた」、「フォローしてくれた」、「相談しやすかった」という項目の回答率が高かったことからも、学生に関心を示す態度や支持的態度が達成感に結びついているといえる。

一方で達成感を低下させた内容の内、「怖かった」を選択した割合が最も高かった。自由回答の中に、「忙しそうであった」、「話しかけにくかった」という回答もあったことから、学生は報告したり、指導を受けたりする機会を持とうとしながらも、病棟の業務の流れを察知できず、その機会をなかなかつかめないでいることが伺えた。以上のことから、学生が臨床指導者との関わりを持とうとする際には、かなりの緊張感を伴いやすいことを教員から指導者に伝えていくことも必要である。

２．既習の学習について

重回帰分析の結果、既習の学習は達成感との強い関連を認めた。前回の調査結果[2]では関連性を認めなかったことから、既習の学習が達成感に及ぼす影響が前回に比べて強いことが推測された。今回の実習では、状態の変化の大きい患者のアセスメントを行う上でも、ケアの方法を考える上でも既習の学習を活用する必要性が高かったためではないかと考える。さらに中央手術部と救急部での見学実習においては、１日ずつという短期間の実習であったため、実習での学びを深めるための事前学習と実習後の補足学習が特に必要であったことも影響していると考える。また、既習の学習の影響得点の平均値は3.63で７要因中では４番目であった。実習は学内で学習したことの応用であり、既習の学習をそのまま活用することが難しい。また今まで学習していなかったことも主体的に学習を深める必要性が生じてくる。自由回答の中に、「分からないことが沢山あり調べるだけでも時間がかかった」という回答もあったことから、新たな学習や学習したことの応用は時間もかかり困難を伴うので、学生にとっては十分にできたという実感が持てなかったためではないかと考える。

達成感を高めた具体的内容として、５割以上の学生が、前回までの実習での教員・臨床指導者のアドバイスが役に立ったという項目を選択していた。このことから、教員や臨床指導者からのアドバイスを生かしながらこれまでの実習を積み重ねてきていることが推測された。一方達成感を低下させた内容として、「以前に学習したことを忘れていた」を選択した割合が高かったことの背景には、２年次までに臨床病態学や成人看護学の講義が終了しており、実習までの間隔が開いたことも影響していると考える。そのため、関連科目の講義内容を想起させるために事前学習の内容を具体的に提示したり、実習中にもカンファレンスなどの機会を活用して、実習で経験した看護の現象に関連した既習学習の内容を採り上げたりなど、その時その場での教授方法の工夫が必要であると考える。

３．自分自身について

重回帰分析の結果、自分自身は達成感との強い関連を認めた。前回の調査結果[2]でも達成感との関連性を認めたことから、自分自身が達成感に及ぼす影響は強いことが推測された。また、自分自身の影響得点の平均値は3.42であり、前回の結果[2] 3.75よりも得点が下がっていた。また、達成感を低下させた内容の内、「自己学習が不足していた」を選択した割合が最も高かった。今回の実習では、複雑な

病態や治療内容を十分に理解した上で予測される問題をアセスメントしていく必要性が今まで以上に高く、更に患者の状態の変化に応じた計画の修正が度々必要となり、そのための幅広い自己学習が求められた。このことが、自己学習の不足を感じた背景にあると考える。

一方達成感を高めた具体的内容の内、「自分なりにがんばった」、「自分の行った看護を見つめなおすことができた」については回答率が６割以上であった。この結果から、自己学習の不足を感じながらも多くの学生が自分なりの課題を持って実習に取り組み、がんばったという肯定的な自己評価をしており、また、自分の行った看護を客観的に捉えようとしていることが推測された。

達成感を低下させた具体的内容の内、「自分の行った看護に深まりがなかった」という回答が３割あり、自由回答の中にも、「ナースに否定されてばかりで、何一つ良い関わりができなかったように感じた」という回答がみられた。片岡らは[5]、学生が、患者・家族・看護師・教員との関わりにおいて戸惑いを感じたり、患者との人間関係において危機感を感じる時、自身の未熟さを全ての原因と決めつける傾向にあると述べている。その結果、自己否定につながり、実習目標という本来の自己の学習課題に向かうことを困難にする。今回の結果からも、「自分に自信がついた」という回答は11.6％であり、がんばったことが自信につながっていないことが推測された。そのため、教員や臨床指導者の関わりとして、学生の努力を評価していくことが肯定的な自己評価を強化することにつながり、実習目標達成に向けての意欲の向上に結びつくと考える。

４．他の要因について

患者との関わりについては、前回の結果[2]では達成感との強い関連を認めたが、今回の結果からは強い関連は認められなかった。このことは、患者との関係を良好に保つ上で自分自身の努力が不可欠であり、今回達成感との関連がみられた自分自身の影響がより強かったことも背景にあると考える。しかし、影響得点の平均値は4.12であり、７要因のうち２番目に高得点であったことから、患者との関わりは達成感を高める要因の１つであるといえる。

学生が受け持った患者は、治療に伴う侵襲や副作用による影響が重大であると予測される患者や複数の合併症を持った患者が多かったため、潜在的な問題も含めた全体像を早期に把握し援助を考えていく必要があった。限られた実習期間の中で全体像を把握することは困難を伴うが、それだけに課題をクリアしたときの達成感は大きいことが伺えた。

教員との関わりについては、影響得点の平均値は4.12であり、前回の結果3.79よりも上昇しており、２番目に高得点であった。特に回答率の高かった内容をみると、阪本ら[3]の示した、学生に関心を示す態度、学習の深まりや理解を促す指導、学生に対する支持的態度が実習での達成感につながっていると考える。しかし重回帰分析の結果からは、達成感との強い関連は認めなかった。今回の実習はクリティカルケアを必要とする患者を受け持っての実習であったため、ケアを通して密に関わる機会の多い臨床指導者との関わりの影響の方が大きいという結果になったと考える。

教員の持つ大きな役割は、学生が実習で経験したさまざまな看護現象をその時その場で教材化し[6]、学生が他の場面においても応用できる原理原則を見出せるように指導していくことである。ここに、患者に対するケア提供に関しての具体的な助言や指導が主となる臨床指導者の役割との違いがあると考える。実習中に学生が経験した一場面を取り上げると、食前のインスリン投与により血糖をコントロールしている手術後の患者が発汗著明で臥床しているところに学生が遭遇した。学生はその理由は判断できなかったものの、異常を察知しすぐに報告した結果低血糖であることが分かり、迅速な対処につながった。教員は、急変時の学生の迅速な判断と対応を評価すると共に、インスリン投与中に予測される症状と迅速な対処の重要性についてグループの他の学生も含めて確認した。このように看護現象をその場で教材化することは、実習目標の達成につながる指導として重要であると考える。

グループメンバーとの関わりについては、影響得点の平均値は4.53であり、前回の結果4.37と同様に最も高得点であった。重回帰分析の結果からは、達成感との強い関連は認めなかったが、達成感を高める要因の１つであるといえる。同じ立場の学生同士でこそ、実習でのつまずきや喜びを共有できることも多い。また、学生同士の関わりの中で実習での緊張感から一時的に開放されることも目標達成に向けての学習意欲を引き出すことにつながっており、それらのことが達成感を高めることに結びついたと考

える。

カリキュラムについては、達成感を高めた内容の回答がいずれも３割に満たず、他の要因と比較しても最も低かった。またカリキュラムの影響得点の平均値は3.05であり、他の要因と比較して最も低かった。重回帰分析の結果からは達成感との強い関連は認めなかったが、達成感を低下させる要因になっていることが推測された。その背景として、①週４日の連続実習であり、週末のブランクが３日間あったこと、そのため、このブランクが患者の状態の予測を困難にした、②クリティカルケア実習として適切な患者を受け持つことに限界があったこと、つまり急変や悪化のリスクはあっても顕在的な問題として現れておらず、生命の危機状態にある重症患者を受け持った学生が少なかったことから、実習目標の達成を困難にした、の２つが考えられる。

①については、週末のブランクを短縮する実習日程の調整が必要である。②については、受け持ち患者の選定にあたりクリティカルケアを必要とする患者を優先する必要があるが、実習病棟での限界もあるため、学習を補う意味でも、カンファレンスの機会に学びを共有したり、中央手術部や救急部の見学実習で経験できる内容を増やすことも検討する必要があると考える。

Ⅴ．結論

達成感に影響する７つの要因のうち、臨床指導者との関わり・既習の学習・自分自身の３つの要因で達成感との強い関連が認められた。この結果から示唆されたことを以下に示す。

1．クリティカルケア実習においては、患者の状態を適切にアセスメントするためにも、ケアを安全に実施するためにも臨床指導者の指導・助言が特に必要となることが示唆された。

2．急激な状態の変化が予測される患者のアセスメントを行う上でも、ケアの方法を考える上でも既習学習の活用の必要性が特に高かったことが影響していることが示唆された。

3．クリティカルケア実習においては幅広い自己学習が特に必要であったため、自己学習不足を感じやすかった反面、課題達成のために自分なりに努力したことを肯定的に自己評価していた。

文献

1）原田慶子他：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習Ｉを考察する（第３報）―達成感・満足感への影響要因より―日本看護学教育学会誌 9(2)、74、1999

2）原田秀子：臨地実習における学生の達成感に影響する要因の検討、山口県立大学看護学部紀要第８号、93-98、2003

3）阪本みどり他：看護学実習における臨床指導者の教授行動・教授態度―看護学生に対する援助的関わり―　日本看護学教育学会誌10(2)、105、2000

4）山下暢子他：看護学実習における学生行動の概念化、看護教育学研究、12(1)、15-28、2003

5）片岡秋子：看護学生と患者との人間関係における危機の状況と教育的介入方法、日本看護学教育学会誌、７(2)、137、1997

6）舟島なをみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題、Quality Nursing 7 (3)、６-14、2001

7）中山登志子他：看護学実習カンファレンスにおける教授活動、看護教育学研究、12(1)、１-14、2003

8）廣田登志子他：実習目標達成にむけた教員の行動に関する研究―看護学実習における学生との相互行為場面に焦点を当てて―、看護教育学研究、10(1)、１-14、2001

9）明石惠子：急性期（周手術期）実習看護実習の“困難”をどう乗り越えるか、看護展望、26(11)、17-22、2001

10）明石惠子他：本学１期生の成人看護学実習（急性期）における行動目標の達成状況及び指導方法の検討、三重看護学誌、４(2)、63-69、2002

Title : A Study of Factors Affecting the Students'Sense of Accomplishment in Nursing Clinical Practicum (The Second Report) Through Investigation after the Adult Nursing Clinical Practicum II (Critical Care Nursing Clinical Practicum)

Author : Hideko Harada, Naomi Harikae, Nobue Nakatani, Sizuka Takano

Nursing Faculty Yamaguchi Prefectural University

Key words : sense of accomplishment, influential factors, critical care nursing clinical practicum, clinical supervision